
SHUFFLE! ~ 帰って来た少年 ~

欠陥電気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHUFFLE！〜帰って来た少年〜

【Nコード】

N9557X

【作者名】

欠陥電気

【あらすじ】

島が三日月状の形をした島“初音島”

そして、一人の少年の物語が始まる・・・。

初作品初投稿なので駄文ですが、色々とアドバイスをくれると嬉しいです。

この小説は、SHUFFLEと、D・C・？のコラボ小説です。尚且、主人公が最強のオリ主です。そして、作者はSHUFFLEの原作をプレイしたことはありません。なので、キャラが違っていたり

しますがご了承下さい。(D・C・?はPS2版ならプレイして
います)

最強等が嫌いな方、コラボ小説が嫌いな方はバックして頂いても構
いません。それでも良いと言う方は、どうぞご覧下さい。

プロローグ

島が三日月状の形をした島“初音島”

そこには、年中枯れない桜が存在した・・・

その桜は、枯れないと同時に願いを叶える桜の木でもあった・・・

そして、一人の魔法使いの女の子が居た・・・

その魔法使いはこう願った・・・

「ボクにも家族を下さい・・・。」

それと同時に、とある病室では少年が少女を救うために、ある一つの嘘をついた・・・

「お前の母親を殺したのは俺だ・・・。」

魔法使いの女の子は家族を手に入れ、少年はある出来事により姿を消した・・・

そこから物語の歯車が少しずつ動き出す・・・

プロローグ（後書き）

アドバイス等あったらよろしくお願いします。

主人公設定（幼少期）（前書き）

今回は、主人公の設定を書きます。

主人公設定（幼少期）

名前：神崎 かんざき 光麻 ひろま

年齢：7歳

身長：義之と同じ位 体重40kg

性別：男

髪色：黒

見た目：若干女の子っぽい顔をしている。

性格：お人好しで、困っている人を放っておけない

魔力ランク：D（BB）

幼い頃は無意識に魔力を抑えている

幼い頃はまだ目が、オッドアイになっておらず、両目とも黒

父親から剣術を習っており、剣の扱いはお手のものだそうだ

因みに、両親は結婚してもなお、ラブラブだそうだ（主人公談）

甘い食べ物が好き。

イメージCV：高橋 美佳子

主人公設定（幼少期）（後書き）

厨二すぎる W W

すみません、主人公の名前を変にして。

第一話（過去編）（前書き）

幼い頃の主人公が初音島に引っ越してきます

第一話（過去編）

「パパ、今度はどこに引つ越すの？」

「今度はなく、お島が三日月の形をした大きな島に引つ越すんだよ」

「そうよ光ちゃん とても大きな島だから、友達もたくさん出来るかもね」

「うん！僕とても楽しみだよ」

あ、自己紹介が遅れたね。僕の名前は神崎 光麻。7歳！

お父さんとお母さんの仕事の都合で前に居た町から、初音島に引つ越す事になって、今は初音島に向かっている途中です

「今度の学校でも友達が出来たら良いな」

物語の歯車はまだ回らない・・・

第一話（過去編）（後書き）

何かgdgdになりそうなきがしてきた（・・・）

アドバイス等よろしくお願いします。

第二話（過去編）

パパやママとお話をしていると

「まもなく初音島に到着します。お忘れ物の無いよう気を付けてください。」

船にあるスピーカーから定番の台詞が聞こえました。

「おーやっ！と初音島に着くぞ。」

「光ちゃん、忘れ物の無いようにしといてね。」

「はーい 楽しみだなー」

～船着き場にて～

「おおー！ここが初音島かー！」

「驚くのは早いぞ光麻。この島には、一年中枯れない桜があったんだよ。」

「一年中！しかも枯れない桜って！スゴいね！まだあったりするの？」

「スゴいやー！一年中枯れない桜なんて！まだあるなら、早く見たいな～ そう思い、パパに聞いてみると」

「残念。何でも、桜はもう枯れちゃったみたいだぞ」
「ええ〜！・・・観てみたかったのに。」

「まあ光ちゃん、それはしょうがない事だと思うわ。ずっと枯れずに咲く桜なんて物は、無いと思うわよ。」

「うう・・・そうだよ。枯れずに咲いてるなんて、あり得ないもんね。お花だって、いつかは枯れちゃうもんね。」

「そうよ光ちゃん。」

「パパ、ママ。早くお家に行こうよ」

荷物持って疲れたよ。そう思っていると

「よし！じゃあ、これから住むお家に行こうか！」

「うんー！」

第二話（過去編）（後書き）

誰か！誰か俺に文才を！．．．ああ、学校面倒だな

アドバイス等あったらよろしくお願いしますね。

第三話（過去編）（前書き）

最近、学校に行くのが楽しいと思うときがある・・・何故だろうか？

第三話（過去編）

しばらく町を歩いていると、閑静な住宅街に着きました。

「もうちよつとでお家に着くわよ。家に着いたら荷物を置いて、近所の方に挨拶に行きましょう。」

「そうだな。これからお世話になるかも知れないからな。」

「近所に同年代の子が居れば良いな」

住宅街を歩いていると、一軒の家が見えてきました。しかも・・・結構デカイ家です。

「ママ、此処が新しいお家？」

「そうよ」

「へえ、かなりデカイね。」

どのくらいデカイかって言うのですね、普通の一軒家と違って、見上げる位の大きさと、横幅も、かなりありますね・・・一対いくらするんだらう・・・この家

「何か・・・前に住んだお家よりも、レベル上がってない？」

因みに前に住んだ家は、普通の一軒家でした。

「そうかしら？前に住んでた家と、そう変わって無いと思うけど。」

「そうだな。この家も安い方だったからな。さて、一旦家に入って荷物を置こう。」

・・・案の定、家の中も広がったです。一階だけでも、部屋がいっぱいあるし、縁側もあるし、二階もあるし・・・絶対この家の値段高いな・・・いくらするのか気になり、僕はパパに聞いてみた。

「パパ。この家いくらするの？」

「んー確か、一千万位の安い値段だったと思うぞ。」

「高！一千万って・・・」

しかもその値段を安いと言い張る時点で、金銭感覚おかしいんじゃないの？って言いたくなる。

くしばらくして〜

「荷物も置いた事だし、ご近所さんに挨拶してきましょう。」

「そうだな。なら、早く行くか 行くぞ光麻。」

「はーい 行こう行こう。」

第三話（過去編）（後書き）

俺に文才を下さい！

結構ggggになりそうな気がしてきた。

第四話（過去編）（前書き）

やばい・・・sgsgdかな？

第四話（過去編）

「まずはお隣に住んでいる人達に挨拶に行きましようか」

「よし。そうと決まれば、早く行こうか。」

手土産（有名なイチゴタルト）を持って、隣の家に向かった。

隣の家の立て札を見ると、「芙蓉」という字が書いてあった・・・
何だか、恐い人にあるような名字だね。

「よし。早速押してみるか。」

パパがそう言って、呼び鈴を押した。

ピンポンという最早聞き慣れた音を聞きながら僕は、どんな人が出てくるのかと、楽しみにしていました。

するとドアから、芙蓉さんのお母さんが出てきました。

「あら？どちら様でしょうか？」

「初めまして。今日からお隣の家に住むことになった神崎です。」

「引っ越しの挨拶をしようと思い、隣に住んでいる芙蓉さんに挨拶をしに来ました。」

二人とも丁寧だな　僕がそう考えていると、芙蓉さんが

「まあまあ、引越しの挨拶ですか　でしたら、家が上がってって下さい　丁度今近所に住んでいる方達も居ますし、父と娘も居るので、是非御上がり下さい」

それなら挨拶する手間も省けて一石二鳥じゃないか

「そうですね　でしたら、お言葉に甘えて上がらせて頂きますね」

「いえいえ　さあ、どうぞ上がって下さい」

「邪魔します」

僕が元気良く言うと

「あらあら　元気の良い息子さんですね」

「はい　自慢の息子です」

「えへへ」

何かそう言われると照れるな”

「是非、娘とも仲良くしてください」

「はい！もちろんです」

仲良くしてくださいか　早くも友達出来ちゃうかな　楽しみだな

リビングに着くと、芙蓉さんのお父さんと僕と同年位の女の子と、芙蓉さんとは別の両親と、これまた同年位の男の子が居た。

「何かあの女の子と男の子全然喋ってないな・・・照れ屋さんなのかな？」

僕はそう考えていた。

「（仲良くなれたら良いな・・・）」

あ、そう言えば手土産渡すの忘れてた。僕はそう思い、キッチンでお茶やお菓子の準備をしている芙蓉さんのお母さんの所へ行っただ。

「（何て呼んだら良いんだろ・・・おばさんって呼ぶには若すぎるし・・・妥当にお姉さんで良いよね？）あの～お姉さん」

そう呼ぶと、芙蓉さんのお母さんは嬉しそうにこっちに向いた。

「あら～お姉さんだなんて嬉しい事言ってくれるわね　どうかしたの？」

「あの、これ・・・お気に召すかどうかは分かりませんが、どうぞ。」

僕はそう言って、手土産（箱に入ったタルト）を渡した。

「あらあら　丁寧にもありがとうね」

きちんと渡せて良かった～結構冷や汗かいた気がしたよ～

「中身は何かしら．．．これはタルトじゃない　うふふ、私好きなよねタルト」

「どうぞやら喜んでくれたようだ」

「早速このタルトを切って、皆で食べましょう　リビングで待ってね」

リビングの方へ向かうと、とても賑やかになっていた．．．相変わらず女の子は黙っていたけどね。

「おう光麻。こっちにおいで。」

パパが手招きをして僕を呼んだ

「なぐにパパ？」

「光麻、自己紹介まだしてないだろ？」

「うん」

「なら、早く自己紹介をしなさい。皆楽しみにしてるからさ」

「あ．．．うん！えっと、僕の名前は神崎光麻です。嫌いな食べ物は無いです。代わりに、好きな食べ物ならいっぱいあります　こんな感じで良いかな？」

「ええ、十分良かったわよ」

「ほ、光麻君は嫌いな食べ物が無いのか。偉いな」

「ありがとうございます えへへ」

褒められるのはあんまり慣れてないから照れるな

「じゃあ私達も自己紹介しましょうか」

「そうだな、では私から。私の名前は土見隼人だ。で、そっちに居るのが」

「土見由紀と言います よろしくね」

何故だろう・・・二人とも若いですね。そう考えていると、男の子が

「僕の名前は土見稟です。これからよろしくね。」

そう言って手を前に出した・・・握手だね

「うん。こちらこそ、これからよろしくね」

僕はそう言って、握手をした。あとは・・・あの女の子とその両親だね。

「じゃあ今度は私達の番だね。私の名前は芙蓉幹夫です。今キツチンに居るのが芙蓉湊だよ。さ、楓も自己紹介しなさい。」

「う・・・」

女の子はそう言って俯いてしまいました・・・恥ずかしいのかな？

僕はそう思い、女の子の方へ行った。

「・・・っ!」

女の子は僕がこっちへ来て、びっくりしているようだ。

「ねえ」

「は、はい!」

相当恐がっているようだ・・・

「僕は君と友達になりたいな あ、もちろん稟君ともね」

「私と・・・友達に?」

「うん。君と友達になりたい。でも、友達になるためには自己紹介が必要だね だから、名前を覚えてくれないかな?」

僕がそう言つと、女の子の顔が笑顔になった

「!?!?・・・はい!私の名前は芙蓉楓です。」

「そうか楓ちゃんか じゃあ、今から僕と楓ちゃんは友達だね」

「ふふ、そうですね 今から、私と光麻君は友達ですね」

「違つよ楓ちゃん。」

「え?」

「稟君とも、僕とも友達だよ　ね　稟君」

「う、うん。僕も楓ちゃんと友達になりたいな。」

「稟君・・・うん！私も稟君とも友達になりたいです。」

「よし、三人で握手をしよう」

僕はそう言っつて、左手に稟君の手を、右手に楓ちゃんの手を握った。

「これからも、三人友達でいようね」

「うん！」「はい！」

三人の手は、きちんと握られていた・・・

第四話（過去編）（後書き）

急展開すぎるかな？文才を下さい。

感想等よろしくお願いしますね

第五話（過去編）（前書き）

ご都合主義ですね・・・はい

第五話（過去編）

手を繋ぎ終わった後、僕はこう思っていた・・・

「（この繋がりを壊したくない・・・これからどんな困難が待っているかも・・・絶対に守ってみせる！）」

そう固く決意をしていると、キッチンから楓ちゃんのお母さんが来た。

「お茶の準備が出来ましたよ」

時計を見てみると、現在午後2時。おやつには早い時間だが、まあ気にしないでおう。

「お茶以外に、神崎さんが持ってきてくれたタルトもありますよ。折角ですし、皆で食べましょう」

「じゃあ、あなた お言葉に甘えて戴きましようか」

「そうだな では、戴くでしょうか」

「いただきます」

「あ〜ん・・・う〜ん美味しい 流石有名店のイチゴタルトだね」

「はい このタルト特有のサクサク感・・・それにイチゴの絶妙な甘さがとてもいいですね」

皆美味しそうにタルトを食べていました。すると、楓ちゃんが僕にタルトが刺さったフォークをこっちに向けて来ました。

「あの・・・光麻君・・・その、あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

何か恥ずかしいな

「うん・・・美味しいよ楓ちゃん」

「そ、そうですね」

「あら 楓ったらやるわね」

「お、お母さん！」

「しかも、間接キスだなんて まだまだ若いのに大胆ね」

そこまで言われると、楓ちゃんは顔を真っ赤にしていた・・・僕も恥ずかしいんだけどね。しかも、お母さんとお父さんもニヤニヤしてこっちみてくるし・・・何か嫌だな。

しばらくすると時計が、3時位になるつとしていた。

「では、そろそろおいとまさせて頂きます。」

「もっとゆっくりしていけば良いのですよ?」

「いえいえ、他の人達にも挨拶をしなければならぬので・・・」

「そうですか?では、また今度いらして下さいな」

「はい では、お邪魔しました」

「お邪魔しました? 楓ちゃん、稟君また学校だね」

「はい」「おう」

二人の返事を聞いた後、僕達は芙蓉家から出た。友達が出来て良かったな?。

さて、次は誰の家に着くんだろう?僕は、とてもドキドキしていた。

第五話（過去編）（後書き）

さて・・・すいませんでした！楓のキャラを壊したなら謝ります。
すいませんでした！

ああ・・・原作やらないとな

第六話（過去編）（前書き）

今回は日本語の使い方がおかしい&文が滅茶苦茶の可能性があるのでご了承ください

第六話（過去編）

楓ちゃんの家を出る頃には、時刻が午後3時30分を指していた・
・早く挨拶を済ませないかね。

「（やっぱり近所つてなると、楓ちゃんの家を除いておばさんばかりなのかな？）」

僕の予想は当たり、歳を取った方が多かった。けど、皆優しそうで良かったな。

流石に時間帯的に、玄関での挨拶のみになった。僕達が挨拶をする
と、笑顔で答えてくれたのでスゴく心地よかったです。

ふう〜。大体は挨拶はしたな〜

「よし、光麻。あと二軒くらい挨拶回りをしたら、家に帰って荷物の片付けをしようか。」

「はい」

次に見た家は、壁が白一色で、屋根が赤い色をした、なんともシンブルな家だった。

「じゃあ押すか。」
ピンポン

この音いい加減聞き慣れたね。そんな風に考えていると、ドアが開き、老眼鏡？をかけたおじいさんが出てきた。

「ん？どちら様ですか？」

「この近くに引越して来た神崎です。今日は挨拶をしに来ました。」

「ほうほう挨拶とな。では、私達も挨拶をしないと。ちょっと待っててくれ。」

おじいさんはそう言って家の中に入っていった。

少し待っていると、おじいさんが二人の女の子を連れて戻って来た。

「すまないな。では改めて、私の名前は朝倉純一だ。ほれ、由夢と音姫も挨拶しなさい。」

『・・・・・・・・』

純一さんがそう言っても、二人は黙っていた。やっぱりいきなりだとそうなるのかな？だったら僕が先に挨拶しようっと。

「えっと、僕の名前は神崎光麻って言うんだ。よろしくね（ニコッ）」

『・・・／／／／』

あれ？二人とも何か顔が赤いな・・・風邪かな？そう思っていると
おだんごヘアーの子が

「ゆめ

「え？」

「朝倉由夢

「へえ～由夢ちゃんか～可愛い名前だね。」

「えへへ～／／／／」

「むっ・・・おとめ

「え？」

「だから！朝倉音姫！」

「おとめちゃんも可愛い名前だね。」

「・・・／／／／」

素直に感想を言うと、音姫ちゃんは、また顔を赤くした・・・やっぱり風邪なのかな？

「あらあら 青春ね」

ママが何か言ってるけど、気にしないでおう。

「ああそうそう。私の名前は神崎由香って言うの。よろしくね」

「因みに俺の名前は神崎総司だ。よろしくな。」

こんな感じで朝倉家との挨拶は終わった。

「では、そろそろ失礼します。」

「うむ。いつでも遊びにおいで。」

「これから仲良くしようね 光麻お兄ちゃん」

「うん よろしくね。」

「それでは……」

「バイバイ 由夢ちゃん、音姫ちゃん」

「うん またね」

「……またね。」

由夢ちゃんは元気良く、音姫ちゃんは小さい手で手を振ってくれた。
何かくすぐったいな。

く自宅にて

「ただいま」

「さあ、さっさと荷物を片付けるか。」

予め、必要最低限の家具は業者の人が置いてくれたため、実質そんなに時間はかからないと思う。

「とりあえず食器を棚に入れるか。」

「はい。」

その後は、作業を終えて、晩御飯を食べて、お風呂に入って、自分の部屋のベッドに横になったら睡魔が襲ってきたので、打ち勝てずに、眠ってしまった。

こんな感じで長い1日が終わった。皆と仲良くしなきゃね。

第六話（過去編）（後書き）

因みに、主人公はフラグを建てていますV（＾－＾）V

第七話（過去編）（前書き）

.....

第七話（過去編）

次の日、朝の5時に目が覚めた僕は、庭に竹刀を持って行った。

外に出てみると、やはり春の朝と言うだけに若干肌寒い。

「寒くても、鍛練はちゃんとしないとな・・・」

ちなみに、朝にやる鍛練は素振りを300回やることと、色々な剣技を試したりする事かな。

「さて、やるかな。」

今日は日曜日だし、長くやってても、あんまり問題は無いよね。

「よし・・・つぶ！・・・」

それから、僕は黙々と素振りをする。そして、辺りには、竹刀を振る音のみが流れていた・・・

「ふ！・・・ふう〜今日は素振りはこれくらいにするかな。」

ちなみに、今日はいつもの300回ではなく、400回素振りをしてきた。

家の時計を覗いて見ると、時刻は朝の6時。素振りだけで1時間も

経ってしまった。母さんもそろそろ起きる頃だし、あと30分鍛練したら、今日の所は止めとこう。

さて、素振りはしたから、後は剣技でもやろうかな。

「でも、あんまりやり過ぎると、近所迷惑だからな。・・・簡単な剣技にしとくか。」

しかも此処は自分の家の庭だからな。あんまりやり過ぎて、後で大変な事にならないようにしないといけないから、結構大変である。

「今日は誰かに、島を案内して貰おうかな。」

楓ちゃんか、由夢ちゃんもしくは、音姫ちゃんにでも案内してもらうかな。・・・皆の用事が無ければの話だけだね。

「さて、それじゃいきますか。“蒼破刃！”」

高速で竹刀を下から振り上げる感じで竹刀を振ると、真空波が用意しておいた木に向かっていった。ドン！

そんな音を聞こえたので、木を見てみると、木が粉々になっていた。

「相変わらず威力凄いな。使った自分でさえ驚いちゃうよ。」

鍛練はこの辺にしとこうかな。母さん起きたし。さっさと朝食の手伝いを・・・って言っても、皿を並べる位だけだね。

「（汗かいたけど、風呂は朝御飯の後で良いか）」

そんな事を思いつつ、家に戻って行った。

第七話（過去編）（後書き）

とりあえず、感想をくれたら・・・嬉しいな！

第八話（過去編）（前書き）

急いで書いたので、いろいろとおかしいかも知れませんが、ご了承ください。

第八話（過去編）

「（ふう）やっぱり鍛練すると汗かくね。」「僕はそう思いながら、シャワーを浴びていた。」

「ふう・・・そろそろ出るかな。」

ちなみに、家には僕とお母さんだけで、お父さんは早速仕事なのか朝早くから出掛けてしまった。

「お母さん、今日、僕初音島を探索してくる。」

「あら？誰かと一緒に行くの？」

「ん〜誰かとして訳じゃないけど・・・とりあえず楓ちゃん辺りに暇があるか聞いてみるつもりだけど・・・」

「ふうん。行くのは構わないけど、もうちょっと時間が経ってから行きなさいな」

確かに、今は朝の9時。行っても迷惑になるだけかな。

「分かった。じゃあ、あと1時間したら行くよ。」

そして1時間後・・・

「じゃ、行ってきます。」

「暗くなる前に帰って来なさいよ。」

「分かった。」

早速楓ちゃんの家に向かった。

隣なので、すぐに着いたけどね。じゃあ、早速呼び鈴を鳴らそうかな。ピンポーン

「（楓ちゃん居るかな？）」

しかし、待ってみても誰も出てこなかった。

「（留守かな？だったら、由夢ちゃんの家に行こうっと。）」

そう思い、僕は朝倉家に向かって行った。

「（さて・・・朝倉家に着いたけど・・・由夢ちゃん達居るかな？）」

「
考えてても、仕方がないよね。よし、押すか。ピンポン

呼び鈴を押してしばらくすると、ドアが開き中から、由夢ちゃんが
出てきた。

「あれ？光麻お兄ちゃん、何か用でもあった？」

「ああ、いやちょっと初音島を誰かに案内して貰おうかなって思っ
てさ。他の子は留守で居ないから、由夢ちゃんの家に来ただけど
・
・
・」

「そうなの？だったら私が案内してあげようか？」

「え？由夢ちゃんが？音姫ちゃんと純一さんは？」

「お姉ちゃんとおじいちゃんは何処かに出掛けちゃったの。」

「え！？もしかして、由夢ちゃん一人で家に居たの？」

「うんそうだよ。でも、おじいちゃんは今すぐ帰って来るよ。寒
いし、一旦お家上がる？」

確かに、ちょっとだけ寒いな。

「じゃあ、お言葉に甘えて上がらして貰おうかな。」

「とびとびとびとびとびとび」

「お邪魔します。」

「へえ、初めて由夢ちゃん達の家に入るけど、結構良い家だね。」

「ソファーにでも座るところか。」

「うん。分かった。」

「お兄ちゃん、お膝の上に座って良い？」

「良いよ おいで」

「わぁーい」

そう言っつて、由夢ちゃんは僕の膝の上に座ってきた。距離が近い
め女の子特有の良い匂いがする／／

「でも、本当に由夢ちゃん一人で留守番してたんだね。偉い偉い」
そう言い、僕は由夢ちゃんの頭を優しく撫でた。

「わ！くすぐりたいよお兄ちゃん・・・／／」

由夢ちゃんが気持ち良さそうに目を細めていた。でも、何で顔を赤くしてるんだろう？

「えへへ／／／」

しかし本当に嬉しそうな笑顔だね。すると、由夢ちゃんは可愛い笑顔のままですごい発言をした

「私ね、将来光麻お兄ちゃんのお嫁さんになる!」

「お!そりゃ大きくなったら楽しみだね」

「うん 待っててね。光麻お兄ちゃん」

とても眩しい笑顔でそう言った。この時、僕はまだ知らなかった・・・あんな大変な事になるなんて・・・

しばらく由夢ちゃんとお話をしていると、純一さんが帰って来た。

「ただいま・・・おお光麻君、家に遊びに来たのかな?」

「あ・・・いえ、今日は由夢ちゃんに初音島を案内して貰おうかなって思いました。」

「ふむ・・・初音島の案内か・・・子供だけでは危ないから、私も一緒に行こう。良いか?光麻君。」

なるほど、確かに子供だけでは危ないね・・・

「良いですよ。由夢ちゃんも良いよね?」

由夢ちゃんにも同意を求めると

「ううん・・・良いよ。」

何か膨れていたけど・・・何で？

「ほほ、青春だね。じゃあ、行くか。お昼は食べたかい？」

「いえ、まだですけど・・・」

「なら、ついでに商店街でお昼ご飯を食べようか。私が奢ってあげるよ。」

「え？良いんですか？だったらお言葉に甘えます。」

「なら、行くか。」

「うん 行くか行くか」

「しかし、本当に広いですね。初音島って。」

「そうかい？さて、此処が商店街だよ。」

「うわあ、すごいですね」

人もたくさんいるし、店も多いし、とにかくすごいです。

「さて、着いた事だしお昼ご飯を食べようか。」

「はい」

「て言っても、ファミレスだけだね。」

「ファミレス？」

「ファミリレストランの事だよ 光麻お兄ちゃん」

そんな会話をしつつ、僕達はファミレスに入って行った。

「ふう純一さん。ありがとうございました。ご飯を奢って貰うなんて。」

「気にせんでも良いぞ。一々気にしてたらかったるいからね。」

「おじいちゃん。商店街までは案内したから、今度は桜公園に行こうよ。」

「ふむ。そうだね。光麻君、今度は桜公園って言う公園に行ってみようか。」

「はい。」

「早く行こ？光麻お兄ちゃん、おじいちゃん。」

由夢ちゃんはそう言うと、僕の手を掴んで走り出した・・・純一さんは歩いてたけどね。

「桜公園にて」

「此処が桜公園だよ。」

「・・・すごい。桜の木がこんなにあるなんて・・・僕、こんなのも初めてみた。」

僕の目の前の光景・・・それは、沢山の桜が咲いていた。

「これだけじゃないんだよ。この桜公園には、秘密基地があるんだよ。」

「秘密基地？」

「こっちに来て」

由夢ちゃんが手招きをしているので、着いていってみると

「！？」

何と、一本の巨大な桜の木があった

「綺麗でしょ？」

「うん・・・確かに綺麗だね・・・」

でも何か引つ掛かるな・・・何でこの一本だけこんなに大きいんだ？そう疑問に思っていると、純一さんがその疑問を解決してくれた。

「この木はな・・・願いを叶える枯れない桜なんだよ。」

「これが・・・枯れない桜・・・」

でも、枯れない桜はもう枯れたはずじゃあ・・・なのに、何で咲いてるんだ？もしかして、誰かがこの木に対して何かをしたのか？・・・考え過ぎかな。

「さて、二人共。そろそろ帰ろうか。大体初音島は案内しただろうし。」

「もうそんな時間ですか？」

腕時計を見てみると、現在午後5時。子供は帰る時間だね。

「それじゃ、帰ろうか。」

「うん」「はい」

そして、家に帰って行った・・・

「それじゃ光麻君。また何時でも遊びに来なさい。」

「はい。分かりました。」

「光麻お兄ちゃん 今日楽しかったよ」

「うん。僕も楽しかったよ」

「今度は、お姉ちゃんとかと一緒に遊ぼうね。」

「うん。分かった。」

「それじゃ、またね」

「バイバイ」

バタン。

ドアが閉まった音を聞きき、僕は家に帰った。

僕は寝る前、枯れない桜について考えていた・・・

「（何であの木が咲いてるんだろう・・・パパは枯れたって言うってたけど・・・しかも、あの木に近づいたら、何か不思議な感覚だったし・・・これ以上考えても無駄だね。さ、明日は小学校に転入するんだ。早く寝ないとね。」

「一方枯れない桜の木にて」

「・・・・・・・・」

「一人の女の子が居た・・・」

第八話（過去編）（後書き）

はいw由夢ちゃんに完全フラグ建てましたねw

何か、二話と話が矛盾しているような気がします。気がしますが、気にしない方向でよろしく願いますw

感想等、あったらよろしく願います。

第九話（過去編）（前書き）

更新遅れてすみませんでしたm（　　）m

今回は、あまり自信が無いので、↓↓↓承下さいm（　　）m

第九話（過去編）

次の日、僕はいつもより遅く起きた。

「ふあゝ眠い。（考え事してたらあまり寝れなかったな）」

ちなみに、考え事というのは、あの枯れない桜の事ですよ。

「さて、今日から学校に行くんだし早く準備しとこつ。」

さて、そろそろ学校に行きますか。

「行ってきまゝす」

「行ってらっしやい」

お母さんにそう言って家を出ると、丁度楓ちゃんと稟君が歩いていました。とりあえず、二人に声をかけてみましょう。

「おゝい。楓ちゃん、稟君」

二人は僕の声を聞くと、こっちに振り向いてきた。

「あ、光麻君。おはようございます。」

「あれ？光麻も学校行くのか？」

「うん。楓ちゃんや稟君と一緒にの学校だよ。」

「そうですか。では、学校でもよろしくお願いしますね。」

「俺からもよろしくな。」

そんな会話をしつつ、学校へ向かった・・・因みに、学校までの道のりを知らなかったので、通りかかった二人に感謝していたのはここだけの話。

「学校にて」

「じゃあ私たちは教室に行きますね。」

「楓ちゃん達と一緒にのクラスになれたら良いな」

ちなみに、楓ちゃんと稟君は一緒にのクラスで、二年二組だそうです。

「まあ俺達と一緒にのクラスになれるように祈っておいたら？」

「分かった。祈っておくよ。」

「じゃあ後でな。」

「後でね。」

凜君達はそう言って自分のクラスに向かって行った。

「さて、職員室行かないとね・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

はい・・・・・・・・分かってましたよ・・・・・・・・こうなるって事になるくらい。

「職員室ってどこ？」・・・・・・・・。」

迷子になってしまいました・・・・・・・・こうなる前に楓ちゃん達に聞けば良かった。

「はぁ・・・・・・・・どうしよう。」

僕がそう呟いていると、一人の女の人を通りかかった。・・・・・・・・丁度良いし、職員室がどこにあるかを聞いてみましょう。

「あの～・・・」

「はい？」

僕の声に反応して女のが、こちらを向いた。

「あの・・・何か用ですか？」

女の子は突然声を掛けられた事により、警戒しているようだ。さうさと用件を言おう。

「すみません・・・職員室ってどこですか？」

「へ？え、えつと職員室は・・・」

～少女説明中～

「・・・に職員室がありますよ。」

「ほうほう・・・ありがとうございます。これで道に迷わないで済みます。」

「いやいや、困った時はお互い様ですよ（ニコッ）」

不覚にも、女の子の笑顔にちょっとドキッとしていた。

「では、これで・・・あ、そうだ。今度お礼がしたいので、名前だけでも教えておきます。僕の名前は神崎光麻です。あなたは？」

「私の名前は八重桜です。」

「桜ちゃんだね 職員室までの道のり教えてくれてありがとう 今度お礼するから。」

「（いきなり下の名前で呼ばれた／＼／＼）お礼なんて良いのに。」

「（ん？何か顔が赤いような気が・・・）いや、それだと僕の気が収まらないからさ。」

「そこまで言うなら、何か考えておきます」

「うん 是非考えておいてね それじゃあね 桜ちゃん。」

「じゃあね神崎君」

（桜side）

あの子って転校生だよね・・・神崎光麻君か・・・

「（見た感じ学年も一緒だし、もし一緒のクラスだったら仲良く出来たら良いな・・・）」

あ、私も早く教室に行かないと。私は足早にその場を去った。

（職員室にて）

「ここが職員室か・・・とりあえず間に合ったな。」

桜ちゃんに教えて貰わなかったら完全に遅刻していただろう。

「さてと、入るか。（ガラ）失礼します。」

扉を開けると、その場に居た先生たちが、一瞬こちらを向いた。

「ええと・・・今日から転入してきた神崎光麻ですけど・・・」

僕が自分の名前を言うと、一人の女の先生がこちらに歩いてきた。
凄いグラマーの人だな

「君が神崎君ね。少し来るのが遅い気がするけど・・・」

「ちよつと職員室までの道のりが分からなくて・・・これから気を
つけます。」

「よろしい あ、ちなみに私は担任の天江夕陽ですよろしくね。じ

「やあ今から教室に向かうから着いてきてね。」

「分かりました。」

「ちなみに、神崎君のクラスは二年二組よ。」

「本当ですか！良かった。」

「あら 嬉しそうね。」

「友達と一緒にのクラスになれたので、嬉しいです。」

「あらあら それは良かったわね。」

「はい。」

僕と先生は、歩きながらそんな話をしていた。

楓 side

「教室にて」

「光麻君・・・迷わずに職員室に行けたかな？」

「さあな。でも、大丈夫だろ。」

「そうだと良いんですが・・・」

私達がそんな話をしていると、先生が教室に入って来た。

「はい。皆席に着いてね」

皆が席に座り、静かになると、先生が話を始めました。

「はい。今日は皆に素敵なお知らせがあります」

それを聞くと、皆がざわついてきました。

「はい、静かに。」

皆が再び静かになると

「今日はこのクラスに新しい仲間が入ります。皆仲良くしてあげてね。特に女の子達 期待しても良いわよ じゃあ、神崎君 入って来て。」

く光麻 side く

「じゃあ私が呼んだら入って来てね」

「はい。分かりました。」

先生が教室に入って行くと、それまで騒がしかった教室が一変して静かになった。

「はい。今日は皆に素敵なお知らせがあります」

それを聞いたクラスの人は、また騒がしくなった。しかし

「はい静かに。」

そう言うと、またもや静かになった・・・あんまり静かだと入りづらいただけだね

「今日はこのクラスに新しい仲間が入ります。皆仲良くしてあげてね。特に女の子達 期待しても良いわよ じゃあ、神崎君 入って来て。」

「（ちよ、先生！何を言ってるんですか！そんなこと言われると余計に緊張するわ！）」

と心の中で思いつつ、深呼吸をして扉を開けた。すると、クラスの人達がこちらを見てきた。僕は素早く黒板の前に立ち、自己紹介をした。

「初めまして。僕の名前は神崎光麻です。両親の都合で、前の居た町からこの初音島に引っ越して来ました。まだ知らない事もたくさんありますが、これからよろしくお願いします（ニコッ）」

□・・・・・・／／／／／

あ、あれ？皆しーんとしてる。それに皆、顔が赤いような・・・は

！もしかして、僕まづいことしちゃった！？

僕がそう思い、焦っていると先生が助け船を出してくれた。

「皆初めての転校生に緊張してるのかな？とりあえず神崎君」

「はい？」

「君の席は、あそこ。あのオレンジ色の髪をした女の子の隣だよ」

オレンジ色の髪をした女の子。つまり楓ちゃんの隣か、良かった

「分かりました。」

先生にそう言われ、席に移動した。席に座ると、楓ちゃんが話しかけてきた。

「光麻君 一緒のクラスになれて良かったですね。これからよろしくお願いします」

「うん 僕も楓ちゃん達と同じクラスになれて嬉しいよ こちらこそこれからよろしくね」

「はい」

そんな会話をしていた。

「じゃあ一時間目は神崎君の質問タイムの時間を取ります。皆どんどん神崎君に質問して良いわよ」

すると、皆が一斉に質問をしてきた。質問って言っても、定番の質問が多かったけどね。例えば好きな食べ物とか、どこから来たのか色々質問された。

そんな感じで、一時間目の時間は過ぎていった。

第九話（過去編）（後書き）

もう駄目だ（> <）何か文が滅茶苦茶だ

感想等あったらよろしくお願いします。

第十話（過去編）（前書き）

今回は、短いですが頑張ってみました。

第十話（過去編）

そしてあつという間にお昼の時間になった

「え？そんなのありですか？」

良いんだよ・・・俺の文才が無いから

「それを言ったら終わりなのは・・・」

「光麻君？誰に話しかけてるんですか？」

「いや、何でもないよ楓ちゃん。」

さて、ボケはこの辺にしまして・・・

今はお昼休みの時間で、皆家からお弁当を持ってきています。ちなみに、今は楓ちゃんと稟君と桜ちゃんと一緒にご飯を食べています。

「しかし、光麻と桜が知り合いだったとはね・・・」

「知り合いつて言っても、職員室が分からなくて、僕が迷っていた所に偶然桜ちゃんが通りかかった時に、道を聞いたただけなんだけどもね。」

「あの時はびっくりしたけどね。いきなり話しかけてきて、職員室はどこですか？なんて聞いてくるもんね。」

「やっぱり光麻君・・・職員室の場所が分からなかったんですね。」

「全く・・・職員室の場所が分からないなら、何で俺達と一緒に居る時に聞かなかったんだよ？」

「その・・・忘れてて・・・テへ」

ノリでやってみただけど・・・やっぱり気持ち悪いですね。今度からは止めときましようか。しかし、なぜか女の子二人組は

『ノノノノ（か、可愛いノノノノ）』

顔を赤くしていた・・・何で？

そんなこんなで、お昼休みがあつという間に終わった。

「さて・・・次の授業は何だったっけ。」

そして時間は過ぎ、放課後になった。ちなみに放課後は、上級生達が部活をやっている。

「さてと、皆帰ろうぜ。」

「あ、待ってください。」

「楓ちゃんと光麻君、早く〜」

稟君と桜ちゃんがそう言ってきた。

「稟君、僕ちよつと用事があるから先に帰ってて。」

「そうか．．．用事があるなら仕方がないな。じゃあ光麻。また明日な。」

「バイバイ〜光麻君。」

「光麻君。また明日。」

「うん。バイバイ〜」

そう言つと、稟君と桜ちゃんと楓ちゃんは帰って行つた。

「さてと．．．もう一回行つてみるかな．．．あそこに。」

あ、でもその前にママに連絡しないとね。そう思い、僕はランドセルにこつそり仕舞つてある携帯（子供が使つても大丈夫な携帯）を取りだし、家に電話した。しばらくのコール音のあとに、家に繋がった。

「はいもしもし。」

「あ、お母さん。」

「あら光ちゃん。どうかしたの？」

「今日帰るの遅くなるから。」

「あら、何か大事な用事でもあるの？」

「うん．．．とても大事な用事がある」

「ふん．．．分かったわ。でも、だからといって遅くなりすぎないようにしてね。」

「分かってるよ。じゃあお母さん。切るよ」

「最低7時までには帰って来るのよ。」

「はい。」

そう言うと、電話が切れた。

ちなみに、今の時間はちょうど5時。

「さてと．．．行きますか。」

僕は、ある目的地に歩いて向かった．．．そう、この時のこの選択により、1つの歯車が回る事を僕は知らなかった．．．。

第十話（過去編）（後書き）

光麻が向かう先とは一体どこなのか・・・

感想等あったらよろしくお願いします。やる気が出ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9557x/>

SHUFFLE! ~ 帰って来た少年 ~

2011年11月20日19時13分発行